

# 風土



紅の花  
神蔵器

クルーズ客船

金魚玉吊つてコスター・ビクトリア

燕来るまつすぐ日本大通り

初蝶たつ石の聖書の開くまま

雲の峰船に真水を給水す

虻宙に止まりて澄める日和かな

眠るため力のこせり鳥雲に  
紅咲くや「雑草園」に背伸びして  
紅の花父の日なれば求めけり  
沙羅散るや百八段の石の上  
老人と乳母車行く立葵  
中沢三重氏  
訃報来る六月の空見てをれば  
一期一会泰山木は天に咲く



# 竹間集

同人作品



港  
ま  
で

山  
田  
暢  
子

青空へ手を入るごとと剪定す  
暗がりへ再びしまふ種袋  
囀りの真つただ中を川流れ  
まつすぐに来て蝶々を見失ふ  
葉桜や一週間の予定表  
サラダ菜をちぎりぬ五月来りけり  
港まで歩くと決めし夏帽子

灯台キャベツ

門  
伝  
史  
会

潮風や灯台キャベツ玉結ぶ  
湾曲の屏風ヶ浦や百千鳥  
サーファーに海傾けて夏怒濤  
灯台の一城をなす卯波かな  
沖霞む地球の丸さ指呼にして  
長閑さや単線かくる草の丈  
鯉幟肩車して届きけり

「淡交」以後(五十五)

野  
沢  
し  
の  
武

本棚に隙間をつくり夏休  
一頭寝そべり二頭寝そべり大虎舞  
少年の白足袋草鞋夏祭  
今朝秋のすでに暑に對く庭の木々  
音程少しはづれて哀し踊唄  
いきなりの風に焰の立つ門火かな  
この残暑口など利いてやるものか

春惜しむ 鈴木 石花

捨て難き旅のカタログ亀鳴けり  
御忌行列木遣りに導師稚児続く  
三門より徳川墓所へ風車  
外に出てラジオ体操風光る  
覆輪の紅き酒中花恋椿  
春惜しむ小間の水指唐三彩  
長閑なるポーランド語の基礎講座

三尺坊 山路 紀子

入学子校門を出て走り出す  
ベルギー王立バレエ学院入学す  
残雪の穂高連峰畦ゆるぶ  
イーゼルを立て雪嶺に向かひけり  
三尺坊 秋葉権現桜咲く  
回し吞む会津の地酒獺期果つ  
空海の行く先々の桜咲く

花筏 岩木 茂

ゆらゆらと薬師如来の山笑ふ  
祇王寺の苔に散りたる白牡丹  
温泉玉子提げ夢千代の街の花  
蜷の歩の曲がるも一途なりにけり  
日のひかり濁さぬやうに辛夷咲く  
海風に竿持て余す浦島草  
もうそこは日本海なり花筏

山鳥 相沢有理子

よそ者が殖ゆる保養地河原鶉  
謝肉祭総出の村のさんざめき  
山鳥の羽音に目覚め丸木小屋  
落花しきり僧立てかけし竹箒  
春宵の中天にはや七つ星  
壺焼きに偲ぶ真砂女と銀座の灯  
土筆野のひかりの中に夫顕ちぬ

秩父の春

柴田 久子

駅ごとくに桜の匂ふ山河かな  
来る人か往く人か橋かすみけり  
SLの音のゆたかに花吹雪  
山腹にかんざしほどのさくらかな  
遠霞 秩父 一村 見失ふ  
石の声水のこゑしてさくら満つ  
垂直に迫り出す岩や水温む  
立ち止まり立ち止まりゆく花菜道  
くれなづくむ空のほてりや八重桜  
旅衣並べて吊す花の宿

# 山河集

同人作品



神蔵  
器選

まんさくや坂登り来し息づかひ  
十并 三乙

包丁の突つ込んである蜷桶  
妻に酒すすめてみたき花菜漬

灯台へ道は上りに風光る  
教授とふ雇用契約鳥雲に

日差しはや花のかをりに光堂  
森屋 慶基

僧坊へこだま返しの蛙かな  
秀衡の枕の窪み目借時

木々芽吹き東稲山を繕へり  
穏やかな空や畑や啄木忌

百の木の百の芽吹き力かな  
上迂 蒼人

囀の揃ひてをりし日差しかな  
山離る黄瀬戸の色の朧月

さくら蕊踏みつつ登る石たたみ  
短めの藤咲き出して八一歌碑

ぱんだぐみ十七人の入園す  
森田 節子

かんば咲く森に白樺美術館  
カンバスに未完の裸婦や春の行く

甲斐信濃境の空や雲雀鳴く  
陽炎の喫水浅く貨物線

貸出しの菜園十面蝶の昼下  
山田 美江

惜春やコーヒー豆の瓶の百  
十面を一万本やチューリップ

茶事記すノートの文字や春灯下  
潮汁浅蜷の殻の布目紋

◇特別作品◇(抄)

## 大磯逍遙

石井 秀一

辛夷咲く明治元勳屋敷跡  
大磯の駅は木造り燕の巢  
落ちさうな春満月や駅を背に  
花馬酔木丘なるわが屋海に向き  
小綬鶏のすぐそばにゐる日永かな  
ガラス戸のなき鴨立庵緑立つ  
大磯は海より八十八夜明く  
石投げて少年となる初夏の海  
汐匂ふ花水川に通し鴨  
大磯にも化粧坂あり虎が雨



# 風土独語／神蔵器



祭られぬ佐助の針の行方かな 豎山 道助

谷崎潤一郎の短編『春琴抄』である。佐助は盲目の三味線師匠春琴に仕える奉公人。春琴は九歳の時に失明、類いまれな美貌の持ち主であった。

やがて、成長してますます美しくなった春琴に、弟子美濃屋丸兵衛の倅利太郎が横恋慕し、それが容れられぬと分かると春琴の美貌に熱湯を浴びせ、顔に火傷を負わせた。佐助は春琴の醜くなった顔を見ないようにと、自分で自分の眼を針で突く。耽美的作風に古典的な色調を加え、いよいよ女性美を追求する谷崎文学に一種宗教的な深まりをみせた傑作である。

針供養は使った古い針や折れた針などの供養であり、裁縫の上達を願い女の幸せを祈ったものである。針本来の目的以外に使われれば、それはもはや凶器である。

しかし、それでは佐助の眼を突いた針も凶器であろうか。私の世話になっっている医院の待合室の、大きな扁額に「鬼手佛心」とある。医師の手術に使うメスは凶器ではない。

佐助の深い愛と献身的な行動はそのまま純化され、一本の針も御仏の心のままである。あまりにもシヨッキングな感動にふるえた。ただし、谷崎文学の『春琴抄』のヒロインは春琴である。

(以下略)

包丁の突つ込んである蛭桶 土井 三乙

蛭桶に包丁を突き込むのは、主婦の生活の知恵で、鉄分を嫌う蛭に砂を吐かせるきめ手である。

産地としては瀬田川の蛭、浜名湖の蛭、関東では利根川・隅田川などが古来から名高いが、知名度はともかくも、東北の十三湖や小川原湖の蛭は絶品である。

私はもう大分前になるが、太宰治生家の斜陽館に一泊したことがある。その時、朝食に出た十三湖の蛭汁が、今でも忘れられない。蛭も味噌味もよく、多少センチメンタルな太宰への思慕、郷愁のようなものがあつたためか、たつた一杯の蛭汁に深い感動を覚えた。

作者の八戸には十三湖よりもっと近くに小川原湖がある。この小川原湖の蛭は上等、十三湖の蛭に勝るとも劣らないという。土井家の蛭はすべて小川原湖のものであろう。一夜、砂を吐かす包丁は一転して、翌朝の健康で幸せな夫妻の笑顔が見える。

# 風土集



## 神蔵器選

犬吠の朧を待ちし虚子の句碑 東京 奥田 茶々

つばめ来る五百万年刻む崖

のどかさや波の鼓の遊歩道

終点の雀隠れの線路かな

単線に手書きの春の時刻表

里山の雲開き行く仏生会 川崎

内藤 静

装丁はむらさき小紋春惜しむ

小康のつづく鶏頭蒔きにけり

鏡花本閉ぢつつ春を惜しみけり

百千鳥天狗像みな羽ひろげ

春の夜の四条大橋渡りをり 藤枝

間島あきら

春展ぐ櫂の一搔き一搔きに

梅開く旅人家持憶良ゐて

飯櫃の籬のあかがね雛祭

田螺鳴く畦のひかりの明るさに

眉上げて茅花流しの安房の国 東京 林 いづみ

東洋のドーバー前に浅蜷採る

惜春や灯台守の記録帳

車中まで届く鯛焼旅のどか

かぎろへる千七百キロの霧鐘かな

蛙合戦千手観音眉動く 高槻 浅田 光代

遠足のリュック囲める楠大樹

春の雲馬のまなこに映りけり

汀まで歩幅を広く夏隣

記者も来て「華越前」の初田植

復活の小澤征爾や春嵐 東京 遊橋 恵美

じやんけんの勝つまでつづく日永かな

先生の青いベストや風光る

春留社

初音かや樹齡二千の幹に瘤

無住寺の句会は彼方木の芽和へ